



Aria -大分音楽幻想-

瀧廉太郎



中山 欽吾
(なかやま きんご)
iichiko総合文化センター館長
公益財団法人大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
公益財団法人東京二期会常務理事

明治になって、近代文明が奔流のように日本に導入され始めた時代、最初に注目された西洋音楽を目指す若者の中に瀧廉太郎がいた。生まれは東京だが、父親の仕事の関係で子供時代を郷里大分県で過ごし、直入郡高等小学校(現在の竹田市立岡本小学校)を卒業後、15歳で東京音楽学校に入学を果たした。そこで才能を評価されて、21歳でドイツのライプツィヒに留学したが、肺結核を患いわずか1年で帰国して、大分市の中心部にあった自宅でわずか23歳の一生を閉じた。しかし、その極めて限られた年月の間に彼が作曲した珠玉の曲の数々は、今も歌い継がれている日本を代表する名曲だ。

前号でも紹介した「荒城の月」、「花」、「箱根八里」の他にも沢山の曲を残しており、幼稚園唱歌として作曲された一連の歌には、「鳩ぽっぽ」、「桃太郎」、「雪やこんこん」、「お正月」などがある。どの曲も聞き覚えのある懐かしい曲だが、今の若い人達には、なじみが少ないかもしれない。例えば、「鳩ぽっぽ」は東くめ作詞の詩に曲を付けた。『ほと

ぽっぽ、ほとぽっぽ、ほとぽっぽ、ほとぽっぽとてい／おてらのやねからおりてこい／まめをやるからみなたべよ...』で、作詞・作曲者不明の『ほとぽっぽ、鳩ぽっぽ、豆が欲しいか、そらやるぞ』ではない。

瀧の作曲した曲で、最も有名で演奏頻度が高いのは、おそらく「荒城の月」だろう。土井晩翠が仙台の青葉城址(一説には会津若松の鶴ヶ城)を見て作った歌詞の、曲を募集した時に、当時学生だった瀧が応募して入選した。瀧は故郷竹田市の岡城址を想いながら作曲したといわれていて、今も岡城の城址公園に行くこの歌が流されている。この歌はある日本人宣教師の紹介で、ベルギーの教会でも認められ、聖歌として歌われていると調べた人がいる。

「荒城の月」で、一ヶ所山田耕筰がメロディを改作した箇所がある。「春高樓の花の宴」の「の」に原曲ではシャープがついているが、山田編曲でシャープがなくなってしまったのだ。このシャープがあることで曲そのものの印象が多少メランコリックな感じになって、歌詞

の雰囲気には合っているように思える。このことは1月8日付けの大分合同新聞の東西南北でも言及されている。専門家の県立芸術文化短大の宮本修名誉教授に聞くと、その部分は瀧が意識的に書いた部分であり、改作によって瀧の意志が曲げられてしまったと憤慨する。歌いやすさとか、使う音階の違いによって生じる日本的なメロディか西欧的メロディかの違いがあつて、瀧は意識的にそれを書き分けている。山田による改作は、瀧のこだわりを無視しているというのが宮本教授の指摘だ。

瀧の絶筆であるピアノ曲「憾」は、三分少々の短い曲だ。「憾」とは「うらみ」と読むが、通常使われる「恨み」と異なり、悔しさや残念さを表す意味だと辞書にはある。「その演奏に当たっては、この曲はまさに命が尽きようとしていた廉太郎が最後に言いたかったことを感じながら弾かなければならない」と、宮本教授は言う。曲の最後に最低音のレの音を、それも右手で弾くように指定があるというのだ。身体を思い切り捻って右手を左手越しに伸ばさなければ弾けない。なぜそのような弾き方を指定したのか。宮本教授は、「レの音とは廉太郎のレ、レクイエム、のレ、まさに命が尽きようとする廉太郎の、「死にたくない!」と叫ぶ遺言のようなものだ」と語ってくれた。

中山 欽吾

